

MIDNIGHT BLACK SHADOW

written by HADEYA

1

雑誌社の小説納期が迫っている。だが.....1行も俺は執筆していない。怠けているのではない。な〜んか書く気がしないのだ。スランプと言う訳でもない。気分が乗らないのだ。何故だろう。
納期は翌日。納品を終えなければ、二度と俺のところに仕事は来ない。その事は良く分かっている。分かり過ぎるくらい。だが.....。

ここまで書いて筆を折った。パソコンの電源を落とし、タバコに火を点ける。一体、何を書けっただ？？？ メロ・ドラマ？ それとも、お涙頂戴のラブ・ストーリィ？ 一層の事、派手なバイオレンスにでも仕上げるか？
その時、携帯電話が着信した。相手はヤクの売人、トミーだった。

「もしもし」

「調子はどうよ、ネッシー」

ネッシー ——俺のニックネーム。

「それが.....良いアイデアが浮かばなくてさ、困ってんだ」

「一発、キメちゃえよ」

「だな。会えるか？」

「一時間後にウキウキで」

「了解。じゃあ」

通話を切った。

この時、俺は思いも寄らなかった。今日と言う日がメガトン級にヘヴィな一日になる事を。

上着のジャケットを羽織り、くわえタバコで俺は外出した。外から鍵を掛け、最寄りのバーである〈ウキウキ〉に向かった。

始まりはそんな感じ、だった。

2

「エス、ないんだ」

エス——覚醒剤の事。トミーは浮かない顔をしている。赤ワインを呑みながら俺は告げた。しかめっ面で。

「じゃあ、何しに来た？？」

「それがよ——」

トミーが身を乗り出す。秘密の話をする時の彼の仕草。

「——ヤバい山があるんだ」

「.....何の話だ？」

「組織が大量のエスを仕入れたって。キロでは及ばないくらいの」

パズルが繋がった。

「それを俺たちが盗む？」

「そう言う事。一石二鳥じゃないか、ネッシー」

「んな事したら——」

俺は言った。当然の如く。

「——東京湾に沈むのが関の山だ」

「ビビってるのか？」

「ビビってる。当たり前だろう」

「このヤマを小説のネタにしたらどうだ？」

イケてるアイデアかも知れない。危険なヤマを踏んで、その体験を作品にする。リサーチにも繋がるし、確かに一石二鳥ではある。

「乗るか、ネッシー？」

トミーは俺の目を見た。良く考えた上で俺は解答した。

「.....乗った」

「行こうぜ」

トミーはワインボトルを掴み、立ち上がった。俺も立った。内心、ビクビクしながら。

黒光りするパンツで移動する。運転席のトミーはワインボトルをラッパ飲みしている。

白バイが通り掛かった。トミーがボトルを隠す。白バイが去った。トミーは再び、ラッパ飲みした。

「段取りは？」

俺は尋ねた。

「目出し帽を被って、ハンドガンで押し入る。ブツを盗んで、バックレる。簡単だろう？」

ああ、簡単だ。小学生でも理解できるほど簡単な話だ。だが俺は理解できずにいる。頭の中でああでもない、こうでもない、作戦を練っている。

パンツが雑居ビルの前に到着した。トミーがグローブボックスからハンドガン——グロックを出し、コッキングする。銃は黒光りしていた。

「チョロい仕事さ」

ならいいが.....。とてつもなく俺は悪い予感がしていた。

3

インターフォンを鳴らした。玄関子機から野太い男性の声がする。

「誰だ？」

目出し帽を被ったトミーが答えた。指で鼻を摘まみ。

「宅配便です」

「待ってろ」

室内で足音。目出し帽を被った俺は息を吐いた。右手にはグロック。生まれて初めて握る本物のピストル。

ドアが開いた。トミーが出て来た男をブン殴った。中へ押し入る。すかさず俺も突入した。その時、グロックが暴発し、男の脳天が吹っ飛んだ。茶色の脳漿が白い壁に飛び散る。

「な、何で撃った！」

トミーが喚いた。俺も喚く。

「撃ってない！」

「撃つたろう！」

「銃が暴発したんだ！」

「逃げ！」

トミーは室内に駆け込んだ。ブツを探す。が、ブツはどこにもない。

「畜生！」

トミーが地団駄を踏んだ。俺は尋ねた。

「ブツはどこだ！」

「見りゃ分かんたろう！ ないんだよ！ ガセネタだ！」

「どうする！」

「……死体を運ぼう」

「運ぶって、どこへ！」

「知るか！」

俺とトミーは手分けして男の死体を運んだ。トミーが頭を掴み、俺が足を掴み。やっとの事でベンツのトランクに死体を乗せた。

ベンツを運転するトミーの顔には汗が噴き出ている。俺も、だった。

「ど、どうする？」

「アリバイ工作だ。風俗へ行こう」

「何で風俗へ？」

「女と犯ってた事にする。女には袖の下を渡す」

頭を抱えた。そんな作戦、上手く行く訳ないからだ。

車内の時計を見た。時刻は16時47分。外は既に夕方になっている。小説の納期が迫っている事など、すっかり俺は忘れていた。

4

風俗街で女を買った。女の名前は、紗理奈。こいつがまた筋金入りのイカレポンチと来ている。

俺たちは紗理奈に金を渡した。通常の二倍の金を。この数時間、俺とトミーと一緒にいた事にして貰う為に。

「って事は——」

紗理奈は言った。

「——アリバイが必要って事でしょう。何か悪い事でもしたんじゃない？」

紗理奈の口調は挑発的だ。悪い事を嗅ぎ、もっと悪い事をしようと企んでいる。トミーは言った。

「悪い事なんて何もしてないぜ」

紗理奈は人差し指を口の前で左右に揺らした。

「それはバレバレの嘘。もっと口止め料を貰わないと」

トミーは溜息を吐いた。観念したのだ。

「分かった、分かった。付いて来い」

俺たちはベンツに移動した。車内で紗理奈に事情を話す——報酬は弾む、死体を片付けるのを手伝わないか？ 紗理奈は答えた——手伝ってもいいけど、一億、頂戴。

こうして俺たちの夜のドライブが始まった。俺たちが乗ったベンツは茨城の山奥を目指している。死体を遺棄すべく。そこで俺たちが目にしたモノは……。

5

ハンディタイプの電ノコをホームセンターで購入した。3つ。それで死体を切り刻む。バラバラになった肉片を埋める。スコップも同時購入しておいた。

まず左腕から切断した。返り血が顔を赤く染める。俺たちの衣服は真っ赤だった。

1時間45分を掛け、バラバラ死体を山に埋めた。着ていた衣服……上着も埋めた。上着を脱いだせいか寒かった。山なだけに寒さがシンシン堪える。

「早くズラかろうぜ」

俺は言った。その時、物音がして、三人は振り向いた。

「……動物？」

紗理奈が呟く。そう動物だ。動物には違いない。だが普通の動物じゃあない。木陰から現れたのはくヴェロキラプトル、つまり全長2メートルの恐竜だった。俺たち三人は間抜けなリアクションを浮かべていた。

「……んな馬鹿な」

「……あり得ない」

「……OH MY GOD」

恐竜が雄叫びを上げた。それを合図に一目散に俺たちが逃げる。全速力で。ヴェロキラプトルは背後から紗理奈に飛び掛かった。後ろを振り返ると紗理奈が恐竜に喰われていた。

俺とトミーは走り続けた。走って走って、走りまくった。その先にあったのが、青く輝くタイムホールだ。

タイムホール——SF小説で読んだ事がある。それは宇宙のどこかに存在し、通過すると時空を超越できる、と。タイムホールは茨城の山奥に存在していたのだ。恐竜はそこからやって来た訳だ。

突如、トミーが横から飛び掛かった恐竜に襲われた。俺はトミーを見捨てた。それどころではない。逃げなければ、俺の身も危ない。考えるまでもなかった。ジャンプして俺はタイムホールに飛び込んだ。

6

着陸した。コロコロ転がりながら。〈トレジャー〉と言う名のバーの前に。

これまで本作はサスペンスだった。しかし、ここからジャンルは一転し、痛快Z級ドラマヘシフトされる。

ポップコーンの準備は良いかな？ こいつは……大傑作だぜ！！！！

*

バー(トレジャー)に入る。中から男が俺に手を振っている。男———知人の武器商人だった。

黒ビールをオーダーし、俺は武器商人に接近した。歩きながら黒ビールの入ったグラスを掴み、武器商人の前に着席する。

早速、本題に入った。武器商人は「ヤバい山がある」と言う。

「ヤバい山って？」

「声がデカいよ」

俺は声を潜めた。

「ヤバい山って？」

クライアントも声を潜める。

「……シンビアート。手に入れた者がいる」

「シンビアート??？」

「寄生物体。シンビアートが身体に寄生すると、グニャグニャに自由変形できるんだ。究極の肉体。俺に半分、あんに半分でどうだ？」

悪い話じゃない。俺の野生の本能が反応する。

「契約、だ。シンビアートはどこにある？」

「嚴重な警備だ。突破するにはチームが必要だ」

「メンバーを揃えよう」

国内最速の列車———未来エクスプレスが走る。快晴の青空の下を。そこにチームメンバーは揃っていた。シンビアート強奪の為、厳選されたプロフェッショナルなメンバーが。

ここで超一流のメンバーを紹介しよう。

7

ジャック・ムーロン。通称、デ・ニーム。

どんな仕事も熟す元特殊部隊員。マッチョの色黒。

デ・ニームには、こんな武勇伝がある。

敵に追われた、デ・ニームは一人の仲間と共に山に逃げた。しかし山には食べ物がない。

デ・ニームは仲間にハンドガンを向けた。仲間が額から冷や汗を流す。

「……な、何故？」

「ステーキが食べたいんだ」

「ステーキなんて、どこにもないぞ！」

パァン！ 乾いた銃声が出て仲間が倒れる。デ・ニームは告げた。

「お前がステーキ、さ」

そう言って、デ・ニームは腰から大きな大きなバウファローナイフを抜いた。

バディ・マイラー。通称、サンダーレ。

黒人。テクノロジーのプロ。サンダーレには、こんな武勇伝がある。

クリスマスの夜。祝祭ムードの街で彼は仕事をしていた。秘密の仕事を。仕事内容は銀行強盗。その為に街一つを停電させる。そんな事が出来るのか。出来たんだ、凄腕の彼には。

車の後部座席——サンダーレがブラインド・タッチでパソコンのキィを乱れ打つ。マシンガンで武装した運転席の男が尋ねる。

「上手く行くか？」

サンダーレがキィを打ちながら答える。

「ああ、エロ本を買うくらいな」

人差し指で、ゆっくりエンターキィを押す。祝祭ムードの街が停電に陥る。

行くぞ！——運転席と助手席の男が物騒なマシンガンを手にも車外へ繰り出した。

ヘロニカ・キュー。通称、ティー。

大きな山を専門に請け負う女性スパイ。時として〈殺し〉をも請け負う絶世の美女。

彼女には、こんな武勇伝がある。

その晩、ティーはインドの王子様のパーティーに出席していた。目的は彼が所有する宝石。しかし宝石は王子様の網膜認証で警備された部屋にある。

ティーは王子様に接近し、誘惑した。そして人っ気のない部屋で——

ティーがサプレッサーの装着された銃を構える。月明りはそのシルエットを映し出す。

「ところで——」

ロマンチックな口説き文句を言いながら彼はティーにキスした。

「うっ！」

突然、彼は倒れた。床でピクピク痙攣している。銃殺——倒れた彼を仰向けにすると、ティーは人差し指を右目に突っ込んだ。そして……

8

「そして右眼球をくり抜いて、宝石のある部屋に侵入した訳。その宝石がこれ」

そう言って、ティーは自分の胸元の宝石を自慢げに指差した——未来エクスプレスの車内で。

彼女の隣に座った、デ・ニームが尋ねた。話題を変える。仕事の話題に。

「報酬は金でなく、シンビアート。そう言う事だな？」

「そうだ」

向かいに着席した俺が答える。隣に座ったサンダーレが尋ねた。

「シンビアートはどこに？」

「デジセーブ社、32階の実験室にある。段取りはこうだ。サンダーレがハッキングで嚴重セキュリティを突破。デ・ニームが室内の警備員を制圧し、ティーがシンビアートを奪う」

「……あんたは？」

サンダーレが尋ねた。俺は答えた。

「俺は作戦の指揮を執る裏方さ。別室から耳にセットされたマイクロイヤホンで逐一、指示を伝達する」

「決行はいつだ？」

ドスの効いた口調でデ・ニームが尋ねた。俺は言った。当然の如く。

「今日だ」

未来エクスプレスが駆け抜ける。俺たちの夢と野望を乗せ———OK LET'S GO！

9

「……しかし計画は失敗した？」

バー〈トレジャー〉でクライアントである武器商人が尋ねた。俺は使い捨てライターでタバコに火を点けた。大麻がジョイントされたタバコに。呼吸を止め、少しして煙を吐き出す。

「その通り。チームメンバーは全員、捕まり———」

「あんただけが助かった」

「まあな」

黒ビールを飲んだ。俺は続けた。

「そんな訳で、この計画はなかった事にしてくれ」

黒ビールを飲み干し、立ち上がった。

「飲み代、宜しく」

告げて、ベースボールキャップを被った。バーを後にしようとした時、目出し帽でマシンガンを武装した一団が店内に押し入った。店内が騒然となる。

「いたぞ！」

目出し帽の一団の一人がネッシーを指差した。デ・ニームの声だった。

「ステーキを食べてやる。〈裏切者〉と言う名のステーキを、な」

お、俺は———

「お、俺は無実だ！ 信じてくれ！」

呆気なく捕まった。男が目出し帽を脱いだ。案の定、男はデ・ニームだった。

デ・ニームが言う。ギザギザのナイフを抜きながら。

「ステーキは血の滴るレアで喰わせて貰うぜ」

「信じてくれ！ 俺は無実だ！ 裏切っていないし、逃げてもない！」

サンダーレが言う。

「もっとマシな言い訳が思い付かねえのか？ 裏切者」

ティーが言う。胸元の宝石を輝かせながら。

「思い付かないのよ。無実でなく、事実だから。でしょう？ ネッシー？」

「俺は無実だ！ 神に誓う！ 神を俺は裏切らない！」

その時、ドカン！と音がしてUFOが店内へ突っ込んだ。壁が大破し、宇宙人が叫んでいる。

「乗って下さい、ネッシー！」

走った——UFOへ向かって。

「待ちやがれ！裏切者！」

背後でけたたましい銃声がかかる。UFOに飛び乗った。UFOは一目散に、その場を逃げ出した。

UFOが急ブレーキを踏み、Uターンする。そのまま猛烈スピードで前進する。宇宙人が運転しながら叫んだ。

「無事ですか！」

「ぶ、無事だ！あんた、誰だ！」

「ミッチーって、呼んで下さい！貴方の大ファンです！」

「どこに逃げる、ミッチー！」

「行き先は一つ！」

「どこだ、と聞いている！」

「捕まって！」

ミッチーがボタンを押した。UFOがターボの速度で疾駆する。そのままUFOはスターゲイトへ飛び込み、どこかへ消えた。

無時、助かったネッシーは礼としてレシートの裏に自分のサインを書き、ミッチーに手渡した。宇宙人ミッチーは感動した。

「これは我々の文明の宝となります」

「だろうな。あばよ」

ネッシーは面倒臭くなり、足早にその場を立ち去った。

.....これで終わりだと思うだろう。トンデモない。この物語はここから始まるのだ。エクストリームな物語が。言っておくが、このエンディングは強烈だぜ！！！！

10

宇宙人ミッチーに助けられたネッシーは平穏な日々を終え、刺激的な生活に戻って行った。やがて派手なセックス・ライフを送る俺の元に一通のメールが届いた。ヤバい山を依頼したい.....そんな内容の。メールの送り主に会う事になった。バー〈ファイナル・ミッション〉で。仕事内容は簡単。キロ単位のヤクの運び屋だ。快諾し、俺はヤクを運んだ。海岸沿いの道を愛車で走っている時、事件は起きた.....。

11

海岸を走る——愛車で。

タバコに火を点けた時、目の前の道路に年寄りの婆さんが倒れているのが目に止まった。婆さんは道を塞いでいる。

婆さんを移動させる為、車から降りた。婆さんに接近する。

「し、心臓が……」

婆さんは胸を抑え、苦しんでいた。かなり苦しんでいる。

「婆さん、大丈夫か？」

どう見ても大丈夫じゃないだろう。何をすべきは分かっている。救急車を呼ぶ事だ。

面倒だが、救急車を呼んだ。生まれて初めての人命救助。そして俺は車に戻った。キロ単位のヤクを運ぶ為に。

車を運転する。ヤクを売人に運ぶ為。再びタバコに火を点ける。大麻のジョイントされたタバコに。

……これは後日、判明した事だが、俺が救った婆さんは億万長者だった。婆さんは俺を探し出し、礼がしたいと申し出た。婆さんは小切手を切った。その額、なな何と——

突如、地震が起きた。大地震——海を見た。海からはタコの姿をした巨大怪獣が顔を覗かせている。

「な、何だ、ありゃ！」

巨大怪獣が海から上陸する。ズシンと言う大きな足音と共に。巨大怪獣は口から炎を吐いた。付近のビルが瞬く間に業火に包まれる。

慌てて、俺は逃げた。一目散に逃げ去った。

——後日、婆さんから小切手を受け取った。その額は婆さんの遺産全額だった。こうして俺は長者番付に載る事になり、その額を株に投資した。この事業が、また大成功。俺が書いた自伝もベストセラーになり、一躍、俺は国民的大スターに。

100キロ、150キロ、200キロ……車の速度がグングン上がって行く。背後では巨大怪獣が暴れている。俺は逃げた。逃げ続けた。キロ単位のヤクを運びながら。

「こいつはヤバいぜ！」

叫んだ。俺の車は夕方の海岸をブツ飛ばした。時速500キロで。巨大怪獣はなお暴れていた。

12

水を浴びせられ、意識を取り戻した。

「こ、ここは……」

「地獄さ」

目の前に立つ、デ・ニームがバケツを放りながら言った。サンダーレもティーも室内にいる。状況が把握できない。

「状況はこう——」

ティーが冷酷な口調で告げる。

「裏切り者のあんたは居眠り運転で事故死したし、アリバイも完璧」

「お、俺は善人だ！」

「善人？」

「婆さんの命の恩人だ！」

「それは違う。貴方は裏切者。私たちを見捨てて、現場からバックレた。ま、いいわ。どれだけ悲鳴を上げても構わない。ここは絶対に悲鳴が外部に漏れない部屋だから」

続けて、サンダーレが言う。

「年貢の納め時だな」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ 死にたくない！」

「さて。ステーキを食べるとしよう」

デ・ニームがナイフを抜いた。その時、ドカン！ という轟音と共に壁が大破した——UFOによる攻撃だった。

「助けてくれ！ 大ピンチだ！」

UFOが見た事のないビーム砲でデ・ニーム一派を撃破した。

「助かったぜ、ミッチー！」

「我々はミッチーではありませんし、貴方は助かっていません」

UFOから声がした。何か様子が可笑しい。

周囲のあらゆる物質が機械生命体にトランスフォームする。隊長と思わしき掃除機……機械生命体が告げた。

「我々は宇宙警察。貴方を逮捕にやって参りました」

「逮捕？！ 俺は善人だぜ、嘘じゃない！！！」

「それは嘘です。貴方はセコくて、ズルくて、胡散臭い。三拍子、揃った小説家だ」

「俺は婆さんを救った！」

「貴方を逮捕します」

そう言って七色に輝く手錠を手に機械生命体は告げた。ネッシーは……機械生命体を突き飛ばし、走って逃げた。

背後から未来銃で撃たれ、全身がピカピカ光った。

「ぎゃあああああつ！！！」

「と言う小説でしたが、如何でしたか？」

プレゼン——某雑誌社で行われている。ネッシーの新作連載の会議は。

編集長が尋ねる。険しい表情で。

「この作品の意図は？」

「この作品の意図は——」

この作品の意図は、痛快Z級小説を書く事。物語はここに完結する。

この小説は貴方のはハートを鷲掴みにするだろう。ネッシーは貴方の心に生き続ける。

お説教はこれくらいにしよう。覚醒剤でもキメて、女と一発、犯ろうぜ。

GO STRAIGHT TO HEAVEN！！！！ この小説は最高傑作だ！！！！(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号
三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872